

## 「探究力・活用力・プレゼンテーション力」を育成するフリータイム学習

副校長 細井宏一

先々週、先週と2週連続で4年生富浦、5年生箱根の移動教室に参加した。本校の移動教室で中心的な活動の一つが「フリータイム学習」である。これは現地の自然・文化・歴史・地理等につまむものから素材を自分で一つ選び、テーマを持って追究していく探究型の学習である。4年生の富浦では、名産の「びわ」「ひもの」「カーネーション」、伝統工芸である「房州うちわ」、「鳥・植物」「魚」などが素材として選ばれることが多い。本校では、3年生「大泉」、4年生「富浦」、5年生「箱根」、6年生「日光」と、フィールドは変えるが4年間に渡り継続して総合学習で取り組んでいる。このような探究学習を積み重ねるようにカリキュラムが組まれていることは、本校の大きな特色である。

フリータイム学習には、一連の学習の流れがある。「①素材を決める」「②テーマを見つける」「③探究する」「④発表する」である。

この②③④の段階が児童にとっては難しい。「②テーマを見つける」は、大学生でも卒業論文を書く際にどのテーマで書くのかを見つけるのに苦労するのと同じである。児童はよく「〇〇について」という大きなテーマにしてしまう。もっと絞ったテーマにしたい。そこで本校では「なぜ〇〇なのか」という疑問形のテーマにまずはさせる。その方が追究しやすくなるためである。次の「③探究する」も簡単ではない。児童はまず「調べる本」や「インターネットで検索」に取り組む。そして「調べたけれどわからない」「載っていない」となると「現地の先生に質問しよう」となる。これは調べ方を学ぶ意味でよいことなのであるが、本校ではそこに体験的な学びを絡ませたいと考える。例えば5年生で「蒲鉾」を素材とするグループがあるが、実際に学校（または家）で蒲鉾を自分で作ってみることをするのだ。すると「うまくできない、おいしくない」などの失敗がある。この経験が大事で「どうしてできないのか」「何が違うのか」といった強い関心をもって、現地で学んでくるのである。最後は「④発表活動」プレゼンテーションの力だ。聞いている方に分かりやすく説得力をもって伝えられるように工夫する。本校では、まずテーマ設定理由から述べさせ、次に「どのように追究したのか」そして「わかったこと・結論」がどうなのかを筋道立てて発表できるとよい。文字ばかりの模造紙による発表ではなく、図や絵を中心としてまとめ、ここでもできれば実物があるとよい。「実際のものがこれです」とか「模型を作ってみましたので、これで説明します」となるとよいのだ。

「探究力・活用力・プレゼンテーション力」の育成は、一回の学習で身につくものではない。探究経験を積み重ねることが大事であると本校では考えている。そこで3年生からカリキュラムを組んでいる。3年生段階では、内容の充実はあまり問わない。まずは何かに興味をもって自分なりに追究し、まとめて発表するという経験が大事である。そして、学年があがるにつれて内容を向上させていくようにしたい。



箱根移動教室フリータイム学習で、乗り物グループを引率した。登山鉄道、ケーブルカー、ロープウェイで、普段見ることができないものや入れないところに入って貴重な体験をした。帰りにグループの児童と「今後どのようなことを追究していきたいか。」と話をした。その中である男の子が「僕は今までブレーキのことに興味をもってきた。でも今回、どの乗り物もブレーキは一つではなくて、もしそれがダメになったときにはさらにこういう装置もあるという二重に備える仕組みがあることに気がついた。そのことを研究してみようと思う」と応えた児童がいた。共通性に気がついたのである。すばらしいことである。移動教室で、児童は大きな学びを得ることができたと思えた瞬間であった。

